

- 1.堂々たる立ち姿。ここまで見事に着こなす方はなかなかいらっしゃいませんね!
- 2.西宮さんのスーツにあわせ私もブラウン系でまとめ取材に臨みました。
- 3.西宮さんの人生に寄り添い時を刻んでいる時計。
- 4.きちんと美しく磨かれている靴。足元から信頼が伝わります。
- 5.体を鍛えられているので胸板があつくスーツ姿がより映えます。



## 税理士という資格を ナメていたことに その時気づきました

祖父が父に学をつけ大学進学したのと同じように、私も大学にすすみました。将来のことは漠然としか考えていなかったのですが、頑張りつづける父の姿をみてるとだんだん心の中で「父の作りあげているこの事務所を継がなアカンな」と思い始め、まずは資格をとろうと、試験にチャレンジしました。しかし全然受かりません…模擬テストはそれなりの成績をとれるのですが、本試験ではまったく通用しない。税理士という資格をナメていたことにその時ようやく気付かされました。親が出来たから自分も受かるだろうくらいにしか思っていなかったのです。その頃は父の会社で働きはじめて「税務署いって書類とってきて」と便利屋さんの扱いかたしてくれませんか。今から考えると当たりまえですよ。資格もなくて何もできない、でも所長の息子だからほうっておくわけにはいけないから、当たり前障りのない仕事だけ頼む。そんな状況に私も少しずつ焦りを感じ始めました。

## そんなときに私、 結婚したんです。 資格もないのに

そんなときに私、結婚したんです。資格もないのになにしてんねん! って話ですよ。私



もそう思います(笑)。結婚させたのは母。あちこちで話をして次々に見合いをもつてくるので。母って息子のことをものすごく見ている。私自身は自分が甘ちゃんという意識はなかったのですが、母からしたら大甘ちゃん。いまのままだとすぐ中途半端でマズいと感じたらしく、結婚したほうが責任も生まれるし考えかたも少し変わるんじゃないかと考えたようです。母が考えていたとおり、結婚した瞬間ちゃんとしたアカン! と強烈に思い始めました、しかもすぐ子どもが出来たので自分が養わないといけないんだ…と恐怖心にちかいました。そのままだでも本気でしていたと思っていたのですが、ぜんぜん本気ではなかった。あとにも先にもあんなに勉強したことがないくらい勉強しました。それでようやく無事に試験合格し、有資格者となり税理士としての仕事をスタートさせました、31歳のころでしたね。

## 父が会社にあまり 来なくなりました

税理士としての仕事を始めてしばらくしたら父が会社にあまり来なくなりました。私としてはどうも感じていたのですが、事務所の仕事にあまり関わらなくなつたのです。もちろん出ないといけない場面には出てくれるのですが、基本はすべて私に丸投げで税務調査やなんやかんやでいきなり私はとんでもなく忙しい状態に追い込まれました。もうちょっと手伝わってくれよ…と正直思ったのですが、後から考えるとこれがよかった。資格さえとれば何とかなる! と正直私は思っていたのですが、そんなことは全然なく、この仕事に一番必要なのは経

験。とにかく様々な場面にたちあつて経験値をあげ、知識を知恵にかえていくことが大事なのです。とくにうちのような小規模事務所の場合はその通り。大手の場合は縦割りになつているのでなにかの専門分野に秀でていなければなにかのプロフェッショナルとして生きていくことができますが、うちのような規模ですとそれでは通用しない。お客様に寄り添いどんな球でも受けるように総合力をあげることが大事。最初に言いましたが、だからうちでは分からないことを補完できるチームを作っています。心配だったとは思いますが、若いころにいろいろな経験をさせてくれた父には感謝しかありません。

## 税務署は、年貢を 取り立てるお代官さん みたいに思っていました

税理士という税務署さんのお付き合いが必須なのですが、昔は税務署に対して非協力的なバイアスをかけていました。というのが税務署は、年貢を取り立てるお代官さんみたいに、心のどこかで思っていて、私はそんな片棒を担がないぞ! クライアントのお金を守る正義の味方だ、と思っていました。いまから考えると大馬鹿野郎ですが(笑)。税理士として駆け出しの頃って、頼られるのがとにかく嬉しいのです。しかも私はなかなか試験に受からなかったのです。税理士として仕事ができ、しかも頼りにされるなんてまるで夢のようでした。だからだんだんクライアント先に対して仲間意識みたいなものが生まれてきていました。守つたらアカン! みたいな使命感すらうまれてくる。あるときクライアント先に税務調査がはいりました。売上をこまかしてそのお金を別の通